

モンゴルのろう教育・現地調査報告

鳥越隆士（兵庫教育大学）

調査日程 2007年2月26日～3月10日

- 2月26日 関西空港を出発，ウランバートルに到着。
- 2月27日 聾学校を視察。
- 2月28日 聾学校を視察。リハビリテーションセンターの視察。
- 3月1日 聾学校を視察。モンゴルー日本センターを訪問。
- 3月2日 聾学校を視察。聾協会会長と意見交換。
- 3月3日 聾女性の会に参加。
- 3月4日 聴覚障害者のためのキリスト教会を訪問。
- 3月5日 モンゴル教育大学を訪問。JICA 事務所訪問。
- 3月6日 NPO 関係者と意見交換。文部科学省を訪問。
- 3月7日 聾学校を視察。
- 3月8日 JICA 事務所長と意見交換。
- 3月9日 聾学校でセミナーを実施。
- 3月10日 不就学ろう児者支援プロジェクトの見学。ウランバートルを出発，関西空港に到着。

調査メモ

2月27日

聾学校に到着。学校は大きい。盲学校と1つになっている (Training and methodological complex school of special education)。校長室で、校長の Gelegjamts 氏、副校長のオユンチミク、それに通訳と私で話をする。まず私の自己紹介。これまでの調査の経緯を話す。特にウズベキスタンでやってきたこと、またモンゴルで調査を考えていることを伝えた。校長から学校の現況について話をしてもらう。1964年創立。43年目。学校名称の説明。聴覚障害児と視覚障害児のための学校。また近隣の養護学校（4つ）にも先生を派遣して、支援をしているとのこと。まさにセンター校としての役割を担っている。障害児教育に関してデンマークの支援が入っている。国連の障害者関連の合意事項に則って教育の整備が進められている。世界レベルの教育内容、指導法の研究を行っているとのこと。また教師教育も重視している。保護者支援も。不就学の障害児も多くいるとのこと。教師は70人。専門的な教育を受けた先生は20人くらい。多くはロシアで勉強してきた。生徒は510人。内、ろうが440人、盲が70人。21県すべて（全国）から生徒が来ている。また近隣の貧困世帯からも生徒が来ている。寮は2棟ある。240人ほどが入寮。1つは最近、世界基金や韓国の自動車会社ヒュンダイからの寄付で出来上がった (No.2 女子寮の方)。2つの方針によって、教育を行っている。1つは、義務教育を行うこと (生徒の実態に合わせて)。2つは、生きていくための職業教育。縫製や木工、絨毯製造などが行われている。卒業後は大学への進学者も多い。教育制度について聞いた。昨年までは、11年制 (5年+4年+2年) だったが、今年度から12年制 (6年+3年+3年) に変わり、義務教育は9年。また入学は、以前は8歳 (だから18歳まで義務教育) だったが、今年から6歳入学となった。また幼稚園 (ここでは保幼一体) の役割が重視されている。3年制で、3歳から5歳まで。ただ全国に740箇所のみ。健常児の54%しか就学していない。障害児の幼稚園はないが、スイスのプロジェクトが12人を選び、寮で幼児教育を始めた。先生を雇ってパイロット研究を行っている。また校長によると

重複障害児の指導も課題を持っている。特別の教育課程を作らないといけないが、まだないとのこと。日本の情報を求められるが、日本も通常の教育課程とは別のプログラムを持っていることを伝える。どうも校長先生は文科省にいた（オドゲレルさんからの情報）せいか、制度上の質問が多い。義務教育9年のあとの高等部3年はすべての子どもが行くわけではないとのこと。校長が大学の教員養成と聾学校の教育課程についての資料が欲しいという（日本語でも可）。送ることを約束する。

手話についてと話を向けると、副校長のオウンチミクさんが話をはじめ。1964年の創立当初から手話を使用しているとのこと。それに対して、旧ソ連では手話は使わず、口話や指文字が中心ではなかったかと聞くと、そうだという。手話は子どもたちが使っていたという意味。教育の中で使い始めたのは、ここ2年ほどだという。昨年から手話についての研究がすすみ、文科省、ユネスコの援助で3000語の辞典が作られた。また15人の教師に3ヶ月間の集中的な手話のトレーニングがなされた。実施団体には大学の先生や聾者も加わっている。

教室を見学。縫製室、絨毯を作っている部屋。木工室。いずれも職業訓練。いずれも生徒が残っていてくれて（すでに昼食の時間に入っていたが）、様子を見学できる。縫製の部屋では小物がたくさん置いてあった。これらの作品で生活の糧になるのかと聞くと、市場で売ったりしているとのこと。またコンクールなどで賞をもらうことも。それらを売ることができる。卒業生で、絨毯を織って生計を立てている人もいる。教室に行く。女子生徒の集会室のような感じ。女子生徒が碁を一生懸命やっていた。また壁に折り紙の作品が多くあった。クモト？という日本人が定期的に来て、ボランティアで折り紙を教えているようだ。1人の生徒（難聴？）が手話通訳をしてくれる。耳の聞こえる（難聴？）生徒が自主的に手話通訳をするようだ。オウンチミクさんも一度日本に行ったことがあるらしい。何かの招待で行ったらしい。聾学校などを見学した。教師は70人だが、うち5人が聴覚障害を持っているとのこと。そのうちの1人はこの聾学校を卒業した（他は難聴者か？）。また現在卒業生で30人の大学生がいる（盲の学生が10人）とのこと。専攻は教員養成、情報、技術大学、外国語大学など。情報保障のサポートの話を知ると、まったくないとのこと。親が助けている（授業を録音して、家で文に書き起しをする）。通訳の話によると、モンゴルの大学進学率はとても高いとのこと。80%ほど。行く必要のない人も行っているとのこと。

オーディオロジストの部屋に行く。騒然とした感じの部屋。引越したばかりでまだ整理できていないとのこと。2年前に（どうも首相が変わったとき）、520万円が政府から補聴器の購入のため支給された。160個を買った。またいろいろなところから中古の補聴器をもらいうけ、修理して使っているとのこと。担当者はオーストラリアやドイツから来た専門家に指導を受けた（病院に定期的に教えに来ているようだ）。デンマークからも機械が来ている。日本からも。日本から中古補聴器を送ってもらったら有効活用できると言う。電池のことを聞くと、確かに高いが、これは企業からなんとか寄付してもらっているとのこと。ただ校内を回っても余り補聴器をつけている生徒がいなかった。またこの政府からの支給は一回きり。その後はないとのこと。

次に耳鼻科医の部屋に行く。Dangaasuren, Bさん。診察の患者をそっちのけで話し始める。アメリカの有名な研究者と遺伝子について共同研究（1998～2003）して、何本か論文を書いたとのこと。その論文リストを見せてもらった。それを誇りにしている。以前病院に勤めていたが、この聾学校に1991年に移ってきた。生徒だけでなく、全国から診察を受けに来る。病院でないので、薬は処方しないが、治療はする。生徒の聴力検査は年に1回している。モンゴルの聴覚障害全般について聞く。薬の原因が最も多い。ストレプトマイシンなど薬の使いすぎによる（1970～80年代）。遺伝的な聴覚障害の発生率が多い県もある。セレンゲ県やドンノート県。聞こえるけど、緘黙や構音障害（口蓋裂）

の子どももいる。

5年生の授業を見学する。**国語**。生徒は12人。黒板いっぱいにもつ名詞の変化表が書かれている。Aab（お父さん）という単語で、お父さんが、に、から、の・・・と変化形のつづりを指文字と声で順番に言わせる、あるいは前に出て書かせる。書いた後また指文字と声で言わせる。繰り返しのドリル学習のようなスタイル。それが終わると、先生が声だけで、「今はどんな季節ですか？」と問い。生徒が手をあげ、指文字と声で「春です」と答える。「あなたは何年生ですか？」「5年生です」。「クラスの中の生徒は何人ですか？」「12人です」。このような脈絡のない問いも多く見られた（これはウズベキスタンの授業形態と同じ）。先生は口に注目させるために、声だけ。生徒は声と指文字で答える。生徒はみんな聞こえないらしい（重度）。問いの対話の合い間の説明では、先生は流暢な手話で行っている。言語入力モードは口型と指文字、説明や話では手話を使う。宿題が出される。名詞（医者）の変化形をノートに書いてくること。通訳の話では、このような変化形の学習は小学校3年で行われるらしい。モンゴルでは通常の小学校でも知識を教えるのが中心。日本のような物語を読んで、心情を理解するとか意見を言い合うような授業はないとのこと。休憩に入るが、1人だけ残って個別指導。鏡の前で、箱型補聴器とイヤホンを使って、発音指導。単音で、母音を復唱。アイウエオ・・・。長音。アー、イー・・・。次に子音。母音はほぼ言えるが、子音の高周波の音（ツェーとかジーとかシー）はなかなか言えない。発音の図を見せたり、呼気のあるのを手に当てたり、胸に手を当てたり、工夫して発音を誘導していた。ときには口を隠して聞き取りをしたりもしていた。このTは50歳くらいだろうか。ベテラン。ロシアで教育を受けたとのこと。単音の次は、文を聞き取らせ、模倣させる。要素から全体へ。古風な指導だ。

昨年の卒業生18人のうち、4分の3ほどが大学（師範大学に2人）や専門学校に進学。教室に生徒の写真が貼ってあって、それに進路先が書かれていた。学校のほかは、運転手とか工場などがあつた。

寄宿舎。2棟ある。4人部屋。男子棟と女子棟に分かれている。視覚障害者も同じ棟。共同の談話室のような部屋がある。男子棟では、一生懸命にテレビを見ていた。男子が親しげに話してくる。名前をいい、アメリカ手話を少し知っているといい、アメリカ手話で話す。寄宿舎は女子寮のほうが、新しい。援助を得て、建てられたばかりという。男子寮のほうが古い。

とりあえず最初の日の聾学校訪問が終わる。学校は広い。唯一の聾学校だけのことはある。廊下が殺風景。指導法は口話法が中心。補聴器はほとんど装用していなかった。ただオージオロジストがいて、補聴器がたくさん購入されているのはウズベキスタンと違うところ。手話は使っているが、言語入力は口話（発音）と指文字。手話は補助的。会話のことば。学校で成人聾者も見かけない。手話への認識はどうか？教材は？NPOの成果はどの程度実践の中に生かされているのか？しばらくはじっくりと授業を見たい。

2月28日

聾学校。授業の参観。1時間目、**1年生算数**の授業。生徒は11人。生徒はコの字状に座っている。通学の子どもはお母さんが連れてきている。教室まで入っていていろいろと世話を焼いている。結構大きい子どももいる（14歳）。先生によると、知的レベルは8歳くらい。学校に来たときは父母の名前もわからなかったとのこと。授業開始。みんな起立。セン、バイーノー（おはようございます）と、一緒に口と指文字で表現。それから手話で表現。座る。先生が、指文字で「立ちなさい、座りなさい」と何人かの子どもの言う。子どもが指示に従う。先生が黒板に、「私は座りました」と書き、指文字で

表現。生徒に確認する。みんな座った状態。生徒は両腕を机の上に出し、互いのにぎる（「学校」という手話単語と同じ状態）。先生が、深呼吸をする（息を出す練習）。生徒も同じようにする。先生が母音の形を順番に作る、「ア、イ、ウ、エ、オ」と。生徒も真似をする。舌を口の中で動かす。舌で頬を内から押ししたり、舌なめずりをしたり。母音を発音する。同時に指文字で。他方の手はのどのところにおき、発音で振動しているかどうか確認させている。母音が終わり、子音に入る。子音も順番に同じように、声と指文字と一緒に表現させる。M→O, M→A と表現させる。次に S 音。これも子音と母音を継起的に表現させる。発音指導が終わる。T が指文字で「算数のノートを出してください」と言う。みんな算数のノートを出す。宿題の回収。新しいノートを配布。先生はいろんな指示を出す。指文字と声で出すことがほとんど。指示が通らなかつたりすると、個別的に手話で話す。4 の数カードを見せる。生徒に指文字で表現させる。次に 3 の数カード。これも同様に指文字と声で表現させる。T が黒板に問題を書く。

$$3 + 4 = \quad 5 + 3 = \quad 6 + 3 = \quad 2 + 3 =$$

$$4 - 3 = \quad 5 - 3 = \quad 6 - 3 = \quad 3 - 2 =$$
 その下にクロスワード用の四角で作った図形。

男の子が前に出て、第一問を答える。手に 3 と 4 を作って、あわせて 7 を出す。別の男の子が前にでる。手に 4 をつくり、それから 3 が引けない。T はそろばんを持って来る。4 つ玉を移動し、3 を元に戻す。答え 1 が解かる。黒板に解答を書く。順番に生徒が 1 人ずつ前に出て、問題の答えを出していく。また席に座っている生徒は、ノートに解答を書いていく。T は巡回し、ノートの解答を添削する。子供同士、よく手話で話をしている。T の説明は口話だけのときもある。合い間に T と通訳を介して話をする。T は専門的なことは大学で学んでいない。聾学校の先生でロシアやドイツで専門的な教育を受けた人に学んでいるとのこと。問題の解答が終わると、クロスワードに入る（クロスワードはよくこの学校の授業で見た）。数字のつづりを四角の中に入れていく。1, 8, 5, 10 のモンゴル単語を四角に入れた。子どもたちの指文字表出は早い。算数の時間だけれど、いきなり国語の時間に（低学年なので、柔軟にしているのだろう）。T が果物の絵カードを持ってきて、それを床にたくさんばら撒き、それに文字カードを乗せていく課題。1 人の生徒がやり始める。絵カードは古い絵。また通訳によると、モンゴルで余り見かけない果物も含まれているとのこと。たぶんロシアかどこか外国のカードをそのまま使っているのかも。T は、11 月から指文字と発音を同時に教えてきたとのこと。手話は？と聞くと、9 月の入学から手話を使っているとのこと。以前は後だったが、現在はすぐに使っている。9 月入学したときは、みんな手話を知らない。身振りやホームサインのようなものを使っていた。手話、文字、指文字、発音を同時に使い、ことばを増やしてきたのだろう。教室にコンピュータの機械が 1 台あったが教師用とのこと。文字はブロック体だった（2 年生からはすべて筆記体が用いられている）。

2 年生の国語の授業。 まずみんな深呼吸をする。次に T が発音と口型で発音指導。母音→子音。T が板書している間、生徒は手話で私語している。手話の能力はあるのだろう。物の種類、家畜、食べもの、果物、服など板書している。単語を示し、「それに何がありますか？」とたずねる。今日は家畜がテーマとのこと。次に、絵を黒板に張る。絵の一部だけが見え、他の部分は隠れている。それを示し「何ですか？」とたずねる。生徒に言わせる。馬とか羊とか動物の名前がいろいろと出てくる。「それには何がありますか？」とたずねる。すると生徒は、「口！」「鼻！」「頬！」「足！」「手！」「首！」「歯！」・・・と指文字で答える。結構、単語を知っている。教師はその答えをすべて黒板に書いていく。生徒はとにかく当ててほしい、答えたい。そのため大声を出す生徒がいた。すると T が静かに話してと制止する。生徒が出したものをチェックしていく。人間の身体部分を表す語と家畜の身体部分

を表す語が異なることがあるからだ。いくつか動物でなく人間の部分を表す単語が含まれていた。例えば、手。動物には手はなく、足と説明する。次に先生が生徒に紙を配布。自分が正解と思う絵を描いてと言う(体の一部のみを見て全体を想像する課題)。生徒が描き始める。多くの子どもは馬を描く。1人は羊の絵を描いた。おもしろいのは2人が、身体部分のみを並べていた。先生は生徒の描いた絵を黒板に並べて貼る。生徒の中に5歳の子どもがいた(カザフ出身。後でプレスクールにも参加していた。親がお金持ちで、早くから学校に行かせたがったそうだ)。絵1つ1つに先生がコメント。みんなじょうずに描けたねとほめる。先生の絵を見せる。やはり馬。部分を描いた子どもがうまく描けなかったと悔やむ。先生は、部分はじょうずにかけているよ、今度は全体を描いてねとフォローする。対話的に授業が進行している。どの絵が一番似ていますか?と生徒にたずねる。指名された生徒が、自分の描いた絵を示す(部分を描いた生徒)。結局3人の子どもの絵が一番似ていると3人を立たせてほめる。他の子どもの絵も、コメント。ちょっとこの頭はオオカミに似ているねとオオカミの絵を出してくる。1人で何もかけなかった子どもがいる。その子どもを前に来させて、先生の書いた馬を2人で鉛筆を持って一緒になぞる。その間、子どもたちが私語。あの絵はブタに似ているなどなど。みんなを立たせて、板書に注意を向けさせて復習。書かれていることをもう1度復唱(指文字、発音)。終了後、少し先生と話す。授業のコメントを求められる。子どもたちが意欲的に学んでいた。対話的に授業を進めていたことを称賛した。

4年生(知的障害がある)の算数の授業。横長の部屋(やや狭い)。中に8人の生徒がいた。みんな小学4年生で知的障害がある。ずいぶん大きい子もいる。11から16歳。知的障害だけでクラスを作るのは珍しいとのこと(この学年のみ)。3つのグループに分かれて授業を受けている。先生は女性の先生が1人。時間で区切って、グループ(個別)指導している。問題がそれぞれ板書してある。

左から、一つ目のグループ $1 + 1 =$ $3 + 1 =$

次のグループが、 $1 \quad 1 \quad 7 \quad 2 \quad 2 \quad 6 \text{ cm}$ を赤で描いてください。

$$\begin{array}{r} + 3 \\ \hline \end{array} \quad \begin{array}{r} + 8 \\ \hline \end{array}$$

最後のグループが

$1 \quad 3 \quad 4 \quad 2 \quad 8 \quad 2 \quad 3$ つの小さい緑の四角を描いてください。

$$\begin{array}{r} + 3 \quad 4 \\ \hline \end{array} \quad \begin{array}{r} + 3 \quad 9 \\ \hline \end{array}$$

2番目の方の文章題は、集中力を育てるための問題とのこと。はじめのグループは1人の女の子。1人では何もできない状態。はさみなども使えないとのこと。今年から算数を始めた。先生がビーズを1つ、2つ机の上におく。子どもに指で数えさせる。「1, 2」。指を見せて「2」と答える。他のグループは自分で、問題と解答をノートに書いている。みんな指で数えている。時々先生が来て、説明したり、確認したり。問題が解けると次の問題を板書。先生が他のグループの指導をしているときに、子ども同士手話で教えあったり、私語をしたり。手話の力はあるように思う。教師の話によると、知的障害の判定は教育と医学の専門家で決めるそうだ。来年は5年生で、それで卒業するそうだ。その後はない。先生は教育大学を出たが、専門の教育は受けていない。この聾学校で20年間勤めているとのこと。

5年生の国語の授業。生徒は8人。授業のはじめは、ここでもみんな深呼吸。先生は口話だけ。母音から子音へと発音の指導。発音しながら指文字を一緒に表出。「季節にはどんなのがありますか?」と発問。子どもたちが、「春, 夏, 秋, 冬」と答える。「今は何の季節ですか?」「春!」「春にはどんな行事がありますか?」・・・先生は口話だけで話を進める。生徒も口話だけ。今日のテーマは「春」

とのこと。先生が絵カード見せる。少し古いような絵カード。「春になると暖かい国から鳥が来ます」と絵の説明。「秋になると、鳥たちは帰ります」と話す。難聴の子どもが多いのか？とにかく口話だけで、春について、絵カードも使いながら、いろんなことを話す（脈絡やストーリーはない）。3月になると家畜が出産するとか、家畜の成体と幼体は呼び方が違うとか。話し言葉で生徒に確認しながら、話を進める。突然、クラスの生徒を2つのグループに分ける。生徒に挙手させ、春について話をさせる。たくさん話したほうが、得点が高い。競争させる。競争的な状況は、モンゴルではよく教師が取るストラテジーのようだ。生徒同士が話すときは手話を使っているときもある。口話ばかり。次に文字から、単語を作る課題。これも2つのグループで競争させる。どうもクラスの3人は聞こえているらしい（口蓋裂？言語障害）。中途失聴もいるらしい。あとは、難聴。

6年生の自然の授業。難聴のトール先生。生徒は9人。1人だけ補聴器を装用。トール先生は、この聾学校の卒業生。我々に「質問があれば、大きな声で言って下さい」と言う。地震について板書してある。それを生徒がノートに写している。教科書を持っていないことが多く、ノートに写すことから授業が始まる。知的障害の生徒が2名いる。その生徒には先生が代わりにノートに写す。みんなボールペンを使っている。通訳の話では、モンゴルの小学校は、以前は8歳で入学。入学前に1ヶ月ほど、書く練習をする。そのときは鉛筆。1年生に入ると、みんなボールペンを使うようだ。ノートに写し終わると、授業が始まる。先生が、「わからないことばがありますか？」と発問。先生は口話と手話を使っている。次に「動く」ということばを説明してくださいと発問。1文1文、文を指し、手話で意味を説明していく。震度の話。1から順番に数字と地震の大きさの関わりを説明していく。時々先生の声がなくなるときがある。「動く」に関しては、手話でいろいろと説明する。例えば、モノを移動させるとか、試験のとき、緊張すると気持ちが動くとか。内容について話し合う。先生が、「地震をテレビで見たことがありますか？家が壊れたり、みんな泣いていたり」と発問。生徒が答える。「アメリカで、ビルが倒れた」。先生、「それは地震でなく、テロ」。他の生徒が、「おばあちゃんの家が壊れたことがある」と言う。対話をしながら、内容の理解を深めているようだ。宿題。震度3以上の様子について、絵に描いてくること（想像しながら）。

図書館とコンピュータ教室を見学。

コンピュータはオコンチメグさんが、外務省から廃棄コンピュータをもらってきて、修理して使っている（予定）そうだ。15台ほどがあった。機種はまちまち。インターネットはつながっていない。図書館は書庫のようなものと広い部屋。日常的に使っているのではなく、週に1回程度、授業で使っているらしい。

3月1日

聾学校。手話指導の授業。教師のサランティアさんが生徒そっちのけで話始める。生徒は、5人。いずれも学習が遅れている（学校に入るのが遅れた、あるいは知的障害がある）生徒ばかり。年齢も19歳から24歳くらい。ひたすら教科書を書き写している。実は手話指導でなく自然の授業だった。彼女は、もともと自然の先生。兄が聾学校の校長だったため、無理に(?)にこの学校に就職した。そのときは、手話はまったく知らない。19年前のこと。それから生徒から手話を学んだ。今は自然と手話を担当している（手話のほうが多い）。担当は、9年生から11年生。この学校では6年生から手話の授業がある。それは別の先生が担当している。いろいろとこれまで作られたテキストを持ってきて紹介してくれた。まず小さい語彙集。1995年に発行された。執筆者はバトナさん。今もこの聾学校で教師をしている。900語が収録。それから初級のテキストおよそ250語。さらに2006年に発行さ

れた手話辞典（3000語を収録）。この編纂委員のメンバーに、サランティアさん、バトナさん、オユニチメグさんが学校側から入っている。その他、聾者が数名と大学の先生。財団（出資者）のメンバー。95年の語彙集が作られた経緯。Linda, Boll というアメリカ女性が手話を教えていた。彼女は平和部隊（ボランティア）のメンバーでやってきて、アメリカ手話を教えた。そこには聾者の参加もあり、モンゴルで使われている手話を集め、整理したいという気運が高まった（2006年の手話辞典の編纂の委員もそこに参加していた）。その後、近くでキリスト教会ができた。牧師はそこを聾者の集まる場にしたかったようだ。教会関係者に彼女が手話を指導した。その教会が聾者のたまり場ようになったという。こういうことが契機になり、95年の手話の語彙集が編纂されたとのこと。本当によくしゃべる。通訳がついていけない。再度、話の内容については事実確認が必要だ。とにかく話を打ち切って授業を見学したいと申し出る。

生徒は相変わらず教科書を写している。時々先生が生徒の前に行き、話をする。家族は何人か将来何になりたいかなどなど（脈絡のない質問）。多くの生徒は、学校に入ったとき何も分からなかった、自分の名前を覚えなかったという。それがこんな風に手話で話せるようになったという。教師は流暢に手話で話していた。手話の能力は高いのだろう。時間が終わり近くなると、生徒たちはノートをしまい始める。時間前に生徒たちが帰っていく（どうもあまり魅力的な授業でないのだろう）。

次は**10年生の手話の授業**という。生徒6人がやってくる。すぐに授業が始まる。内容はなんとアメリカ手話の授業だった。アメリカの指文字をみんなで表現する、数字を表現する。一人ひとり先生と対話。「名前は？」「あなたは聾者、難聴者？」「学年は？」「どこに住んでいる？」と会話を進めていく。初級レベルの授業。生徒にとっては少々boringのような内容。やはり聴者が手話を指導することに抵抗がある。後で聞くと、必ずしもアメリカ手話に拘っているわけではないという。たまたま10年生が英語を学んでいるので、それと関係づける意味で（関心をもつだろう、あるいは勉強の助けになる）、アメリカ手話を取り入れているとのこと。確かに手話の能力はあるのだけれども、手話に関しての専門的な知識がどの程度あるのか不明。生徒たちは日常的に手話を使っているのに、なぜモンゴル手話の指導が必要かとたずねてみた。生徒たちの知識は限られている、単語も多く知らないという。それで新しく使った辞書に基づいて手話を指導しているのだという。どうも単語の学習が主かもしれない。カリキュラムはテーマごとに指導するとのこと。少なくとも文法のような話はないのだろう。時間数は週に1時間のみ。すべての生徒（6年生以上）に手話の授業があるとのこと。授業終了後、301室をのぞく。担当者が来ていた。

Sign and Learn Project (2006.7-2007.6)と301の部屋に大きな段幕が張られていた。聾学校の中に2室がこのプロジェクトの部屋になっている。担当者は2人。1人のBolorさんに話をうかがう。4つのプログラムを進行しているとのこと。健康教育（在学生対象）、手話初級講習（生徒対象）、手話初級講習（教師対象）、健康教育（卒業生対象）。

健康教育プログラムは、在学生（9年生～11年生）が対象。週1回、各3時間で10週の30時間のプログラム。テーマは12回に分かれていて、①健康とは、②出産、③タバコ、④酒、⑤伝染病、⑥エイズ、⑦いじめ、⑧障害児の教育、⑨職業、⑩自信を持つこと、⑪自分と他者を尊敬すること、⑫コミュニケーションについて、となっている。卒業生対象も同じ内容のプログラム。15人が受講した。

手話初級プログラム（生徒対象）は、土曜日のみ30時間と家庭訪問を加えたプログラム。対象者は聾学校の生徒でなく、学校に行っていない、ウランバートルの郊外に住む聴覚障害の子どもたち（成人も含む）。15人が卒業した。不就学の聾児が多く、支援が必要。家庭訪問することによって家族に

も教育の必要性を伝えることができ、また学習のフォローができる。教師対象のプログラムは、内容は同じ。ただし1週間の集中講義(30時間)。各県(30県)から2名ずつ、計60人の講習を行った。文部科学省の後援を得た。これらの先生は、郡部での聴覚障害児の支援に関わる。その成果についてたずねたが、ドーノードの難聴学級で指導を受けた先生が担当していること。また地方にある師範大学(分校?小学校教員のみ養成)で手話の指導を行っているとのこと。内容は、①オリエンテーション?、②あいさつ、③指文字、④数字、⑤家族、⑥職業、⑦教育、⑧乗り物、⑨?、⑩服、⑪自然、環境、⑫健康、⑬感情、⑭色、⑮食料品、⑯果物、野菜、⑰人と社会、⑱動物、家畜、⑲聴覚障害者とのコミュニケーションについて、⑳手話の歌、それに試験。テーマ別のよくある手話の講習会か。

このプログラムと聾学校の関係を尋ねた。プログラムには、ろうの先生(スポーツの教科)にも関わってもらっているとのこと。ただし一部の先生のみ。校内でプログラムのことを聞いてもあまり情報が得られなかったことを伝えた。学校の教育体制とのつながりは希薄とのこと。寄宿舎の行事で少し関わることもあるらしい。

担当者のポーロールさんのバックグラウンドを聞いた。2ヶ月間の手話の講習会に参加。全国で600人ほどが参加したそう(ADRAの援助、スイスの財団?)。受講生は、聴覚障害者、先生、公務員、いろんな層の人が参加したらしい。内容は初級レベル。

いろいろと資料をもらう。どうも学校の教育実践(特に手話の活用の部分)に関わるというよりも学校の周辺での取り組みという感じだった。でも勢力的にいろいろとやっている(学校教育でなかなかカバーできない部分)。NPOの本来の姿だろう。

少し情報ももらった。Helping Hand(これもNPO)が手話学習のCDを制作。ポーロールさんが持っていた。今は手に入らない。活動もしていないとのこと。また聾学校の2階にろう協会の事務所がある!聾者の団体はたくさんあるとのこと。この事務所にいるチェデンバルさんが統一をしたいとの意図を持っている。事務所に行ったが不在。Mongolian Federation of the Deaf "New Messenger"とドアのところに書かれていた。「新しいメッセンジャー」に何らかの意味があるのだろう。本人にインタビューをしてみないことには分からない。メールを送ってもらう。NPOが華々しく活動を展開したり、消滅したり、聾者団体もたくさんあるという。小さい国なのに不可思議な様態だ。

リハビリテーションセンターを訪問。リハビリテーションセンターというには古い施設だった。設備も十分でなさそう。手話の指導を担当しているのは、サランチメゲさん。難聴者(補聴器をつけていた。ただ普通にしゃべれ、気づかなかった)だが、手話通訳者のパイオニアか(テレビのニュースでも手話通訳をやっていたが、今はお金がなく、なくなっている)。ご主人が聴覚障害者。聴覚障害者団体の中心的なメンバーらしい(どの団体だろう?)。職業訓練には、104人の障害者が入っている(うち聴覚障害者が10人ほど)。国立なので無料。1年間のプログラム。木工やコンピュータ、園芸など様々なコースがあり、聴覚障害者も様々なコースに在籍。先生はすべて手話ができるそう。サランチメゲさんが教えたそう。サランチメゲさんは、聴覚障害者だけを集めた手話の授業を担当している。中には学校に行っていない人もいる。聾学校卒業生も何人かいた。手話の辞書を使って、語彙を増やすそう。やはり単語の指導(それを通してモンゴル語も指導)がメインなのであろう。生徒と少し交流。アメリカ手話を少し知っている人もいた。日本手話も。日本人がきたのだろうか?プロジェクトを立ち上げるのであれば、メンバーとして加わってもらう必要があるかも。例えば、手話のモデルなど。

モンゴル日本センターを訪問。担当者は荒井氏。こちらの研究プロジェクトの概要を説明し、意見交換、情報交換。TV会議のことも伝えたがそれほど乗ってくるという感じではなかった。日本センター

の役割が、市場経済化の支援にあると何度も伝えられる。障害者支援はまあ、ちょっと違うということか。荒井氏も5月までで、帰国するとのこと。元青年海外協力隊員でモンゴルでのビデオ編集で来たとのこと。DVDやコンピュータによる教材制作を進めてきた(ビデオはもう汎用性がない!)。DVDは中国製が安い。全対応なので汎用性がある。館内の案内をしてもらう。部屋など使えそう。IT教室で聴覚障害者のコースを作ることを提案。もし、ろう協が意欲的ならば(アドバイザーになるような人材がいれば)連絡がほしいとのこと。JICAの連絡先を教えてください。JICAで情報収集をしたほうがいいだろう。

3月2日

聾学校。まず**2年生の算数の授業。**生徒は7人。副校長も同席。また深呼吸から、次に舌の運動。唇の運動。発音は余りなかった。「3月2日、金曜日」を板書。それを指文字と声と一緒に表現する(生徒も一緒に)。黒板に、数式がいくつか書かれている。生徒1人ずつ出てきて、解く。 $20+30+10+=$ これはすぐに解かり、答え60とかく。その下に、 $30+3+1=$ と書かれている。生徒はすぐに61と書く。Tは違うでしょうと言う(たぶん)。生徒は指を折り始める。Tはそろばんを持ってくる。一緒に、30と玉を動かし、さらに3, 1と動かす。正解がわかる。34と書いて席に戻る。隣の女の子に手話でいろいろと話している。手話の力はあるようだ。次に別の男の子が指名される。前に出る。式は、 $40-20-10=$ 。10とうまく答え、答えを書く。下に、 $40-2-1=$ の式。わからない。そろばんで考える。手で何度も10を示す(4回で40)。位取りがよくわかっていないのであろう。同じ2でも20の2と2の2があるのだ。日本のようにタイルを使ったりしないようだ。数字とそろばん、指を折るだけ。絵を描くこともない。次に女の子。 $40-30-10=$ よくわからないようだ。Tの顔をうかがいながら、0の答えを出す。次に、式 $40-3-1=$ 26と答える。そろばんで確認させる。36と答える。教師が、生徒が間違っただけを書くとすぐ消すのが気になった。間違っただけから考えさせるといふ姿勢がないのだろうか? またそろばんが欠けている部分があり(すべての段に10玉ないといけませんが、1つの段だけ6つしかない)。Tは暗黙のうちにその段を使わないが、使ってしまう生徒もいて、当然答えが間違ってしまう。次に男の子。 $50+10+20=$ 男の子にとって難しいのだろう。なかなか解からない。手話で10を何度も表現したりする。先生が、黒板に $5+1+2$ とかく。それで80と書ける。その下、 $50+1+2=$ とある。答えを80と書く。Tはすぐに消し、考えさせる。子どもが8と書くが、これもすぐ消す。そろばんでまず50を動かし、それから1, 2を動かす。ただし上の段から順番に差しながら10, 20, 30, 40, 50と手話で表現。それから片手の5にもう一方の手で1と2を加えた。8を手話で表現し、8と書いた。Tはそろばんの段階で正解できたと思ったのだろう。他の子どものところに行く。その間に、この生徒は8と誤答を書いて席に戻る。別の子どもが指名され53と書く。この生徒は結局、理解できていなかったのだろう。2番目の式はほぼ全滅。副校長は担当の先生と話。3つの計算は教えたのか? とたずねる。担当の先生は、昨日はみんなできたという(本当?)。式の練習が終わると、次はまたクロスワード。クロスワードの四角に1, 2, 3と書いてある。この数字の文字で書いたらいい。1人の女の子が前に出てくる。1は, H o r, 2はX o o pと書けるが、3の数字がわからない。先生がサポート。頭の文字は? rだよ。子どもがrと書く。次がわからない。考えこんでいる。自分で指文字をいろいろと出しながら考えている。女の子はまだ考えている。他の生徒に答えを聞く。指文字で教えてもらい、掲示物を指さして教えてもらう(数字とそのつづりが書いてある掲示物がある)。それを見て、何とかr y p a Bと書ける。先生にほめられて、席に戻る。別の課題。次に「5つの赤い三角」「6つの緑の四角」を描く課題。先生が指文字と

声で、問題を読み上げる。生徒たちはそれぞれ自分のノートにやり始める。1人の男の子を指名。彼はノートに書いていない。色鉛筆を持っていないのだ。彼は前に来て、黒板に答えを描き始める。なんとか1人で描ける。赤い三角を5つ描く。次に同じように赤い四角を描き始めるとすぐに先生が制止。描いたものを消し、「緑」を声と指文字で表現する。手話でなく、あくまでも指文字。生徒が描いた後、その場で、全部でいくつですかと文章を書き、一緒に発音と指文字で表現する。生徒が $5 + 6 = 11$ と書く。先生は11のつづりを書かせる。

小学2年生の自然。生徒は7人。生徒はみんな入学が遅れたとのこと。大きい子どももいる（20歳が3人もいる。他は19歳、16歳、15歳など）。3人は少し聞こえるようだ。口だけで話す。田舎からやってきた子どもたちで、ほとんどは5年生で卒業する。テーマは季節。教師によると、1年生のときは、文字は読めなかったそうだ。T、「季節はいくつありますか?」「春、夏、秋、冬」と答える。先生はしゃべりながら指文字で。何月と何月が春ですか?指文字だけでなく、手話の単語も多用している。ある男子生徒。季節ということばがわからないようだ。他のクラスよりも先生の手話の表現が多いように感じた。T、「秋になると、森はどんな色になりますか?」声を出しながら、その文を板書。また「冬になると、気候はどうなりますか?」と板書。生徒が「冬になると・・・」と答える（寒くなる?雪が降る?）。Tがよろしいと答える。同じような（現実や彼らの当面の生活とは少し離れた、脈絡のない）問いと答えが延々と続く。生徒たちはおどおどしている。自信を持って語っていないように感じた。ある生徒は先生の手話を繰り返すのみ。本当に理解しているのだろうか?1人の生徒を前に出し、黒板に書かせようとしている（答えと）。書けない。生徒に対する教師の関係が威圧的。先生は畳み込むように生徒に説明し、手を動かさせようとする。絵といろんな手がかりを使うでもなし。ことばばかりで攻めている。私語ではみんな生き生きと手話で話しているのに。前に出た生徒に、まず手話で表現させ、それを指文字で表現させようとする。それから文字へのストラテジーだろうが。先生、「春になるとどうなりますか?」生徒、「あったかくなります」。先生は渡り鳥の絵を見せ、「鳥がやってきます」と言う。先生が生徒に絵を見せ、「どんな季節ですか?」と質問。「春」と言ったり、「夏」と言ったり。実際、先生は渡り鳥のことを言おうとしているのだけど、生徒は単に鳥しかみていない。鳥は、春にも夏にもいるということか?（モンゴルには渡り鳥はいるのだろうか?）どうもずれている。先生は我々に対して、10回も20回も何度も教えるが、なかなか覚えなないとこぼす。どうも回数でないのだが・・・。授業の最後に、もう1度、1人の生徒に立たせ、発問。「春は何月から何月ですか?」男子生徒は答えられない。この質問ができることにどんな意味があるのだろうか?疑問を感じた。

聾学校内のろう協会の部屋を訪問。ツェデンバルさん。部屋には古着などのダンボールがうず高く積まれていた。みんなから寄付してもらって、貧しい聾者に配るのだと言う。はじめ通訳者と筆談をしていたが、ときどき直接手話で、後は口話（通訳を介して）で話をした。聾者は生活が厳しい、就職もできない、聾学校でもきちんと職業訓練をしていない。いろんな人が聾者に関わっているが、本当に聾者のことを考えてやっているかどうか。聾学校の先生も、手話が十分できる先生は30%から60%くらいだろうと手厳しい。ツェデンバルさん自身、国から給料をもらっていない。ボランティアでこの仕事をしているとのこと。国の内外からの人や基金などから援助（大きいものも小さいものも感謝している）をもらって活動をしている。聴覚障害教育が大きな問題という。彼自身、郡部のろう児者と会ったりしている。様々な援助を行っている。調査もしたし、手話を教えたりもしてきた。21県あるが、手話がわからない人、文字がわからない人がたくさんいた。必要なものを与えたりもした。学校の中には十分な職業訓練がない。リハビリセンターがあるだけ（十分でない）。JICAの問題。JICA

は 45 日間の聾者を日本へ派遣して研修させるプログラムを行っている。これまでモンゴルから 2 人派遣されたが、十分に成果が生かされていない。本当は聾者が派遣されるべきなのに、健聴者（医者？）が派遣された。もう 1 人は聾者だが、たくさんのお金をもらって、それで酒びたりとのこと。まったく聾者の福祉に生かされていない。デフファミリーの聾者を派遣すべきだ。その人たちならば、聾者の心を理解して、聾者のための活動に生かすことができるだろう。JICA の派遣推薦の案内はこちらに来ない。JICA に文句を言っている。聴覚障害関連団体は 12 ある。彼が中心になって、一緒に共同してやっといこうと声をかけたが、バラバラの状態。中には自分で勝手に団体を作った者もあるし、聴者がやっている団体もある（支援団体も含まれる？）。12 のうち、聾者が中心になっているのは、2 団体のみ。ツェデンバルさんの団体と WFD に加盟している聾者協会。この団体は会長（シャラワドルチ）はあまり積極的でない（十分な活動もできていない）。オフィスはなく、自分の工場を連絡先にしている。WFD の会議の案内が来ても、自分たちだけで勝手に決めて、12 月のアジア太平洋会議でも取り巻きの聴者を派遣した。その写真を証拠写真として私に渡した。5 名のうち、通訳者が 2 人、後は聾者でなく、聴者だったそうだ。モンゴルに成人聾者は 8000 人ほど。うちツェデンバルさんの団体には 2000 人ほどが加入。もう 1 つの団体には 200 人くらいらしい（不確か）。団体のハンコを 3 つ持っている（スポーツ団体など）。聴者の団体は何かのプロジェクトを立ち上げ、外国から援助をもらい、適当に成果を公表して、後は自分の懐に入れる（それで解散する）という。槍玉に挙げたのが、Helping Hands が作った一番新しい辞書。分厚いのを作ったが、中にはモンゴルで使われていない手話も含まれている。アメリカ手話や韓国、日本の手話も含まれているとのこと。形を作るためにいろんな国の手話を寄せ集めたと酷評している。辞書では、1995 年に作ったもののほうが、実際にモンゴルで使われている手話を収録しているという。学校で使うテキストに関して、1970 年代に作られた（社会主義時代）古いテキストを紹介した（1 部いただいた）。聾者の集まる場所をうかがった。テキストを作ったところは私腹を肥やし、文部省の監査が入り、解散したとのこと。聾者が日曜日に教会に集まる。聾者は仕事がないので、教会に行くと食事をもらえる。韓国の写真があった。仕事のない聴覚障害者を韓国に労働者として派遣した。若い女性は向こうで結婚して帰ってこなくなったという。いろんなことをしている。御礼を言って、写真を撮って、部屋を出る。最後に会長はモンゴルの聾者の本当のことを知ってほしいと言う。

12:30 に寄宿舎の**幼稚園（NPO の活動）**へ。幼稚園（保育園）と聞いていたが、実際は学童保育のようなもの。生徒は 5 人。4 人が 1 年生、1 人が 2 年生（5 歳のカザフ人の子ども。2 年生のクラスでも見た。お金持ちで親が早くから学校に入れたがったそうだ）。活動は 12 から 2 時まで。学校が終わってからここに来る（週 3 回？）。指導員は 3 人。いずれも聾者。今指導員の資格取得のための学校に通っているそうだ。ちなみに指導員の資格は大学あるいは短期大学で取得できるそうだ。教育大学にコースがある。指導員の 1 人と少し話す。彼女は韓国に行ったことがあるそうで、少し韓国手話ができる。部屋にはほとんどおもちゃらしいものはない。学習教材のようなものばかり（それも少ない）。絵本もない。子どもたちはボールを跳ねたり、取っ組み合いをしたり。じっと座ってボーとしていたり。遊びこなしているという感じがしない。指導員も積極的に遊びに誘うという感じがしない。ただ見ているだけ。通訳によると、モンゴルの指導員は質的に高くないらしい。活動も学習が中心。親のニーズが高い。文字を教えたり、英語を教えたり。国のカリキュラムでは遊び中心で、教えるはいけないうことになっているが誰も守っていない。通訳によると、指導員の表情がいいとのこと。一般には指導員が学習ばかりしているので表情も硬いとのこと。食事（あるいはおやつ？）にスープとお茶。終わったら別の部屋に行き学習。韓国人（聴者、ボランティアらしい）が創造的な内容の授業をするら

しい。新聞紙で何かを作るのだろう。通訳者もいた。残念ながら授業を見ることができなかった。そうこするうちにここの代表が来た。ソイルマーさん。聴者。もと **Helping Hands** で活動。団体が消滅後、この幼稚園のプロジェクトを始めたとのこと。教育大学の修士課程。障害児の指導法を勉強中。大学にはこの領域に関心を持っている先生はいないとのこと。彼女は聴覚障害の分野で 15 年間仕事をしてきたという。後から、ユムジールさんが来る。彼女は難聴。彼女も **Helping Hands** のメンバーだった。昨年、宮崎で開かれたユースキャンプに参加したとのこと。他に 2 人がモンゴルから参加。

幼稚園は社会主義の時代には存在したが、民主制になり、なくなった。この幼稚園のプログラムはろう児のためのもので現在唯一の活動。教員の養成（ろうの指導員）とともにカリキュラムも作成している。2006 年にまず 1 ヶ月行った。これは学校に就学する前に実施。心理学の専門家と共同で実施。発達検査も行った。手話で指導。参加者は 12 人。プログラム終了後 6 人が聾学校に入学。その生徒が現在の生徒だ。バイリンガル教育をめざしているのか？（モンゴル手話が第一言語、モンゴル語が第二言語）とたずねると、まだ研究段階。ただ学校では必ずしもモンゴル手話が使われていない。手話を教えるのは 6 年生になってから。幼稚園と学校のギャップがあるのでバイリンガルをめざしているとは言えないと慎重なことば。でも将来的には聾学校と協調してやっていきたいと言う。校長や副校長、聾の先生や手話の先生とはよく話しているとのこと。そのプログラムの次に、2006 年 10 月から 12 月まで、子どもの集中力をよくする学習プログラムを実施した。また現在創造力を成長させるプログラムを実施中。2007 年 2 月 27 日から 4 月 7 日まで。月曜日からはじまったばかり。今後また就学前プログラムを実施予定（2007 年 5 月 15 日から 6 月 15 日まで）。最終的には聴覚障害児の幼稚園を作ることが目標。現在は短期のプログラムを実施しているのみ。子どもたちが来たときは自分の手話だけ（ホームサイン？）。今はみんな手話でコミュニケーションが取れるようになって学校に入学できる。プロジェクトの名称は、聴覚障害をもつ子どもたちの応援プロジェクト。4 つからなる。1 つは、幼稚園の設立、2 つは、先生養成。現在の聾学校の教師は読み書きばかり。手話をことばとして取り扱っていない。先生の力量形成。3 つ目は、心理学の専門家に、教師や保護者に講義をしてもらう（セミナー）、4 つ目は、アメリカの聴覚障害教育の専門家を招聘すること。まだ 1 つめしかお金が獲得できていない。まだアイデアの段階。教師養成に関しては、まず辞典を **Helping Hand** で作った。これが第一段階になるという。この件について聾者からの批判をどう考えるか聞いてみた。確かに必ずしも今のモンゴルの聾者の手話を反映しているわけではないと認める。例えば、モンゴル語にはあるが、手話にはない（例えば、家畜の細かい名称）ものは編纂委員で作成した。また国際的な手話（エイズなど）も入れた。またモンゴル手話にあり、なかなかモンゴル語に訳せないようなものは入っていないという。ただこの本は教育を与えるためには必要な本と言う。聴覚障害者がこの本を受け入れるには時間がかかるとも言う。なかなか微妙だ。今後、ここに編纂された手話がどのように使われるようになったのか（使われないのか）を調査する必要があるとも言う。編纂委員に聾者が入っているが、これでよしとはならない。必ずしも聾コミュニティ（一般の聾者）の意向が入っていないのだ（ウズベキスタンも似たような状況かも・・・）。日本やウズベキスタンでの教材開発の試み、手話で教えることの意義、手話から音声言語への渡りの話などをした。ほぼ共通認識が持てた。日本の聾者や聾学校の様子、情報が欲しいと要望される。聾者の集まりに関して、キリスト教会がある。また聾者の女性の会が在るとのこと。

3 月 3 日

聾女性の会に参加。正式名称は、**TENGERLEG OXID KLUB**（空飛ぶ＝元気な女性の会）。12 人

くらいだろうか。男性が1人、後は女性。会場は障害児のためのセンターで、土曜日のみ部屋を借りて活動しているとのこと（2時から6時まで）。日常的には、聾学校の女生徒の部屋で、活動している（3時以降）。代表のブヤンバスベン（Byanbasuven）さん。教育大学で社会福祉の勉強をしている。メンバーは29 聾学校生徒と卒業生（大学生）。メンバーは25人（大学生が10人）。発足当初は女性のみだったが、現在は男性が3名入っている。ちなみに男性の会があるのかと聞くとないと言う。じゃー、聾男性はどこにいるのかと聞くと、学校でバスケットでもしているという。会費はない。希望者は入会できる。この会の発足の経緯を示した文章を見せてもらった。通訳によると、2003年10月10日に女性基金から援助をもらって、聴覚障害女性のためのセミナーが開かれた。それは、1日はどんなことをするか、給料をどんなふうにするか、アルコールについて、生活の知識などを学習するプログラム。そのセミナーを契機として、その後オユンチメグ先生に相談。継続的に集まるようになった。はじめは聾学校で集まっていたが、ここの会場が無料で借れるようになり、ここで会合が持たれている。会の目的の話。親たちは自分の聴覚障害をもつ子供に教材などは準備できるが、本当のニーズを把握していない。いまや聴覚障害女性は周りとは自由にコミュニケーションが取れるようになった。学びたいという興味や意欲が増えてきた。自分たちの経験を共有しながら、もっと自信を持って自らの要望をまわりに伝えていくことができるようになるためこの会が作られたとのこと。何をしているかという、話し合いをしたり、手芸をしたり、折り紙を作ったりとのこと。活動の内容はみんなで決めるとのこと。もうすぐ折り紙の大会があるので、その作品をみんなで作っているとのこと。折り紙センターが日本人の援助で作られた保育園にある。折り紙を教えるために、時々日本人が来るらしい。手話はできない。将来的には聴覚障害青年の会として、政府から認可を受けたい。また日本の青年部とも交流をしたいとのこと。

みんなに聾学校の経験を聞いた。みんなよくないという。まず手話を使ってくれなかった、口ばかりで授業が不満。また聴覚障害児のための教科書がない。聾学校を卒業しても仕事がない。大学に入ってもついていけず1年、2年で辞める人もいる。大学を出ても就職がない。聴覚障害のことがわからない先生が多い。大学でどんなふう勉強をしているかという、サポートはない。友達ノートを書いたり、家族に教えてもらったり、先生に後から（事前に）教えてもらったり。大学の専攻は、教育、芸術、コンピュータなど。コンピュータの学習に関して、興味があるかどうか尋ねると、みんな興味がある。もしコンピュータの技術を身につけると仕事ができる。今聴覚障害者で3人コンピュータ関連の仕事をしている（自営）。うち2人は大学出。聴覚障害者がコンピュータの勉強するのは難しい。聾学校は機械がそろっていない。情報技術大学に入るのはなかなか難しい。私立は学費が高い。1人を紹介してもらおう（ネミヒボエル、25歳くらい）。明日会う約束。聾学校の先生になりたいかどうか聞くと、なりたい人は誰もいない。希望しても入れないという（なかなか空きがない）。通訳によると学校ごとに先生を募集し、コネで入ることも多いとのこと。代表の彼女に将来は聾学校で仕事をしたいかとたずねると、その気持ちはないという。この団体で仕事をしたい。政府から認可を受け、外国の援助団体から支援を受けてプロジェクトを立ち上げたいという。「外国」からの援助が彼ら人生に大きな意味を持っている。

3月4日

聴覚障害者のためのキリスト教会へ行く。2時到着。体育館のような場所。この建物には他にも教会があるようだ。聴覚障害者がたくさんいた。200人はいただろうか。音声は一切なし。黙々と手話だけで進められていた。まさに聾者の世界だ。女性の牧師（モンゴル人だろうか）が説教をしていた。

次に若い男性が袋を持ち、太鼓の音にあわせて、賛美歌のような踊りをしていた。それにあわせて、たくさんの人が前に行き、袋に寄付を入れていた。その後、女性が説教。説教というより、何か連絡事項のような感じ。その後、男性の牧師（後で聞いたらカナダ人）が同じように、説教でなく、話をしていて（何か連絡のような感じ、時間とか日の話をしていたようだ）。このような会があるから、聾協회가しゃきっとしないのか。あるいは聾協회가しっかりしないから、このような会が繁盛するのか。昨日会った、女性の会の代表も来ていた。その他の大学生も何人か見た。若い人が多いようだ。老人はいないようだった。話が終わると（3時頃）、解散。ただ聾者はあちこちで話し込んでいた。後ろの方にいると、聾者が寄ってきた。知らない人なので珍しかったのだろう。「日本から来た。名前はたかし。聾者と交流するために来た」と手話で何とか自己紹介すると向こうもいろいろと話してくる。アメリカ手話を知っているという人が話しかけてくる。彼はアメリカ手話と英語をセンターのようなところで教えているという。カナダ人の牧師もやってきた。彼自身聾者。モンゴルの手話で流暢に説教できるなんてすばらしい。これくらいのことをするからこそ、地元の聾者が集まってくるのだろう。いろいろと話を聞きたかったが、とにかく通訳がないので話ができない。この会の調査はまた次回にしよう。私ももう少しモンゴルの手話ができなければどうしようもない。

女性の会の代表が、約束していたコンピュータ技師の聾の男性を引き合わせてくれた。ちょっと頼りなさそうな若い男性。ざわざわしていたので、外に出て、喫茶店のようなところで話を聞いた。自己紹介。名前は、ネメフバヤール（Нэ м э х б а я р）。彼は、29 聾学校を卒業後（1999）、情報大学に入学（2002年）。コンピュータを学んだ。卒業（2006）後、仕事はしていないという。奥さんも大学出。同級生。彼女は会社に勤めているらしい。通訳によると、大きな会社。版下を作る仕事だそう。奥さんも聴覚障害。子どもが1人。聴者。彼の専門は、コンピュータグラフィックデザイン。仕事はないが、前は幼稚園で手伝いをしていた。Web ページを製作中とのこと。その他、掲示物をコンピュータで作ったりしている。今仕事を探している最中。他にコンピュータに詳しい人はいるかとたずねると、1人。コンピュータそのものの勉強をしている学生（3年）がいるとのこと。今情報大学に10人くらい学生がいるとのこと。成人では、他にはいないとのこと。彼がパイオニアということか。日本センターで聴覚障害者のためのコンピュータ教室を作るかもしれない。そのアドバイザーとして日本センターに紹介してもいいかと尋ねると、構わないという。彼ももし教室を開くと、たくさん参加するだろうという。

3月5日

モンゴル教育大学バッチィンゲル先生と会う。心理学の講師。もともと知的障害の専門で、モスクワ教育大学で勉強してきた。しばらく養護学校で働いていたが、2003年より大学に替わった。大学の中では障害児教育に関する授業が少しだけある。そこで手話や指文字など簡単なものだけを教えている。聾学校に教育実習に学生を連れて行くことも。2005年に林ケンゾウという人と2年間一緒に仕事をした。林さんは、もと養護学校の校長。だからたぶんシニアボランティアだろう。テーマはインクルージョン。日本にも行って、京都教育大学の先生と交流したり、モンゴルの教育についての講義をしたりもした。養護学校も見学した。日本の進んだ状況も理解している。こちらの意図を伝える。聾教育でプロジェクトを立ち上げたいというと、協力したいとのこと。他に人材はいない（師範大学に1人聴覚障害のことを知っている人がいるだけ、ツウェンさん）。自分は文科省と聾学校の間にいる。双方にコンタクトを取ることができるとアピール。モンゴル教育大学というのは複雑だ。大学の傘下に12の学部（学校と通訳が訳していたが、schoolの意味だからやはり学部）がある。バッチ

インゲルさんがいるところが教育研究学部(心理, ソーシャルワーク, 指導法の部門がある)。その他, 生物学部, 数学部, 幼稚園の先生を養成する学部, 初等教育学部(小学校の先生を養成)など。難聴のユムジールさんもここの大学院生。バッチインゲルさんも知っていた。聾学校の様子を見て, 今一番必要なものは何かと聞いてみた。手話を活用していることは理解している。子どもの状態も大変だが, 先生の状況も大変。教員養成や研修が重要と考えているとのこと。また難聴児などインクルージョンの環境も考える必要がある。日本のインクルージョンの状況を情報提供。少し頼りない気はするが, 何とか共同研究者になりえるのではないかと。オюнチメグさんが会ったらしいという人でもあったし。

聾学校へ。10時50分頃到着。5年生の手話の授業の見学を申し入れたが, どうも誰がやっているか, オюнチメグ先生も把握していないらしい。助手(?)の先生に聞くと, 別の。今日はない。水曜日にあることがわかる。じゃー, 1, 2年生の国語の授業を見学したいという。その助手の先生があちこち教室を見て回る。1年生の先生は, 発音ばかりしていると, 見学を受け入れたくない様子。別の教室へ行くと, 国語でなく, 数学という。なかなか見学を受け入れてくれる教室がない。その中で**7年生の国語**が見ることができた(途中から)。やはり見られるというのはいやなものだ。生徒は10人。名詞の授業。一般名詞と固有名詞について学んでいる。教室にモンゴル文字の掲示があった。生徒に順番に「名詞を教えてください」という(先生は大体手話と声で話す)。生徒が1人ずつ立って, 名詞を手話で言う。1番目の生徒は言えない(名詞の意味がわからないのか)。次々と生徒を立て答えさせる。「お父さん」「お母さん」「学校」「本」などが次々に出てくる。手話だけでなく, 指文字でも答えさせる。ある生徒が「読む」と手話で表す。するとTは「読むは名詞ですか」と他の生徒に聞く。「違う」と答える。時に先生がプロンプトを出す。紙を手に持ち, 「これは何ですか?」「紙は名詞ですか?」とたずねる。次の生徒。名詞はたくさんあると言っていくつか答える。また別の生徒に, Tが上を指差し, 「あれは何ですか?電灯ですね。電灯は名詞ですか?」とたずねる。次に, 「単語を入れて文を作りましょう」という。「先生が授業をするのを手伝います。私のクラスの先生は・・・です。」という文が出てくる。いろんな文が出てくる。生徒が挙手をして, 文を手話で表現する。「国語と文学を先生が教えています」と発言する。またTが「クラスという単語を使って, 文を作ってください」という。対話形式で名詞について学んだ後, 生徒にノートを出させる。「ノートに日付を書いてください」。あらかじめ板書してある文章を先生が示し, 「この文を読んでください」という。生徒に指文字で読ませる。先生が説明する。名詞には一般名詞と固有名詞がある。一般名詞は, 周りにあるもの, 自然とかを表す。固有名詞は, 人の名前, 場所の名前, 店の名前など・・・と説明する。生徒も先生の説明に対して, いろいろと反応がある。対話的に授業が進行している。黒板にもそのようなことが書かれてある。次にTは一人ひとり質問をする(理解したかどうか確認)。「本は一般名詞ですか?」「あなたの名前は?それは固有名詞ですか?」など。教科書の47Pを開けてくださいという。その部分をノートに書き写す(黒板を見て写す人も)。みんなが教科書を持っているわけでもない(2~3人はもっていなかった)。さらにTは「自分で質問と答えを考えて, 文をノートに書いて下さい」と言う。生徒がノートに書き始める。・・・しばらく生徒の周りを回って支援。生徒の1人に「授業が終わった後, 勉強に来てください」と言う。どうもその生徒はしばらく休んでいて久しぶりに来たらしい。補習をするのだろう。後でTがその生徒は知的障害を持つという。最後に先生が宿題を出す(モンゴルの学校では, 必ず宿題を出すそうだ)。本に書いてある2つの質問に答えること。1, 一般名詞, 固有名詞それぞれ5つずつ書く, 2, その名詞を使って文を作る。また先生が国語の試験が近づいているのでしっかりと勉強するようと言う。また国語のコンテストが学年末にあり, それに

クラスから3人ずつ出ないといけないらしい。そういうような競争的な環境をよくモンゴルでは使うとのこと。

次に**4年生の国語の授業**。生徒は10人。みんな全く聞こえない子ども。9歳から12歳（飛び級もいる？）若い先生（グンジェさん）。後で聞くと、モスクワの教育大学に留学してきた。障害児教育が専門。専門に勉強した人は、若い人では彼女だけ。後は40代以上。彼女は大学するとき、歯学を勉強していたが、政府の留学生試験に合格して、5年間モスクワに行った。はじめは障害児教育とは知らなかったそうだ。ただ勉強してきて良かったという。モスクワでは手話の授業はなく、ロシア手話は学んでいない。専門家ということで帰国後聾学校に採用された。入ったときは、手話は知らない。この3年間で、本で勉強したり、子どもたちに教えてもらったりして何とかできるようになった。手話に関しての教員研修はないとのこと。手話の授業は特にしていない。国語とか算数で関連する手話を教えた。これまでずっと担任をしてきたが、自分は専門なので12年生まで持ちたいという。また通常の小学校だと採用の試験があるが（学校ごと、後で文科省の監査がある）、ここではなかったとのこと。空きがあると、コネで補充することが多いとのこと。

授業のテーマは、やはり文法の授業。黒板に、名詞、数詞、形容詞、動詞と書いてあり、その下に質問（疑問詞）が書かれている。だれ？何？いくつ？どんなふうに？どうしていますか？と。「動詞について、どんなふうに質問しますか」と先生が話している。Tが、「今何をしていますか？」とたずね、Tが「歩いています」と答える。また「今書いています」と答える。動詞をめぐる質問と答えの例を示す。Tは、声をしっかりと出している。また手話が十分でないのだろう。すべての声に手話がついているわけではない。指文字ばかりをさせるわけでもない。そういう意味では、他の先生の発音と指文字に拘った硬直的な授業でもないように感じた。「質問のところを見ながら、文を作りましょう。例文をまねて作って下さい」と言う。「ノートを2冊買いました」と書き、1つ1つ単語を手話で確認する。生徒もその手話をまねしている。1人を指名、その生徒が文を作り、黒板に書く。「生徒がかばんをかけました」と書く。ただ生徒がつづりを間違うとさっと消し、ただしいつづりを教える。教えるとき、手話や指文字を使う。次の生徒が指名される。前に出て、黒板に文を書き始める。またつづりを間違ったのだろう。Tがさっと消し、指文字で修正。書いた文章は、「ゾルバートはリンゴを食べた」。Tがお父さん、お母さん、お医者さんなどいろいろ使っているよとプロンプト。次の生徒は、「おばあちゃんが乳搾りをしました」と書く。書いた後、Tは生徒に指文字と声で復唱させる。次に形容詞に入る。黒板の「形容詞」を示し、例を生徒に答えさせる。生徒は手話で「低い」「・・・」といくつか答える。それをTは板書する。その他色もあるよといい、赤いコップを示し、「赤い」と、またはさみを示し「黒い」と手話で表現する。このあたりも余り指文字に拘っていない。板書。「質問に答えなさい。あなたのかばんは何色ですか？」と書く。Tがみんなのかばんを見てくださいという。一人ひとり、あなたのは何色？赤ですね。次は？青ですね、あなたのも青い、と対話形式でかばんの色を手話で生徒と一緒に確認していく。それぞれ自分のかばんの色を書いてくださいといって、ノートに答えを書かせる。次に板書。「あなたはノートが何冊ありますか？」と書く。何人かの生徒に手話で尋ねる。ある子どもは、自分のロッカーのところに行き、ノートを数え、Tに「私は24冊持っている」という。これも自分のノートの数を書かせる。次は、「お兄さんは、何を食べましたか？」と書く。生徒が自分の席でTに対して手話で答えようとする。「お菓子、あめ・・・」いろいろ出てくる。じゃあ「お兄さんは本を食べました。これはいいですか？」とたずねる。みんな首を振る。じゃ、「お兄さんは飴を食べました」と書きましょうと提案する。単に書かせる、覚えさせるだけでなく、少し考えさせたり、自分に引き寄せた活動を取り入れている点はいいところだ。生徒たちもよく反応してい

る。宿題を出す。私の学校について作文を書くことが課題。聾学校の先生で教材を作成している。それに沿って宿題を出すらしい。この生徒は2年生レベル（算数も2年生の教科書を持っていた）。教科書の問題をそのまま宿題にすると難しいので、独自の教材を作ったとのこと。

JICA 訪問。教育担当の宮崎さん、バヤラーさんと意見交換、情報交換。**JICA** モンゴルとしては今のところ障害児教育のプロジェクトを立ち上げる予定はないとのこと。基礎教育のプロジェクトが進行中。市場経済化への人材育成が今の中心的な取り組み。ボランティアか草の根協力で対応は可能とのこと。文科省から要請を出すことも重要と助言を受ける。余り協力的ではないよう。そもそも障害児教育の理解とか関心が余りなさそうだった。ちょっと期待はできないかな。

3月6日

10時から301でマルクさん（**NPO**の代表）に会う。サラさん（モンゴル人）も同席。通訳もいたが英語で話す。自己紹介とお互いにする。マルクは、経緯はよくわからなかったが、英語とかASLを教えるために、モンゴルにやってきた。それからオーストラリアやスイスの財団から援助金をもらって、いろんなプロジェクトを展開してきた。はじめ聾者2人雇って、教室にアシスタントとして投入したが、これはうまく行かなかった。聾者はやはりモンゴル語に不安があり、その点が教師から理解が得られなかったとのこと。その他、文科省とも協力して、教師の手話トレーニング（地方の学校の先生が参加）を行ったり、土曜日に学校に来ていない子どもたちを集めて、いろんなプログラム（手話や読み書き、踊りとか）を行ったり、学校の高学年の生徒に健康教育を行ったり、辞書を作ったり・・・

（このあたりは以前ポローロさんに聞いたとおりの）。辞書に関しても結果は満足していないよう。実際にモンゴルで使われている手話以外の手話も含められており、それに対する批判があるとの認識は持っている。ただし将来に向けての1ステップとはなると言っていた。またハンガリーから援助をもらって活動しているとき、専門家がやってきて、彼女は口話法を広めたとのこと。現在、手話と口話と折衷的なスタンスで取り組んでいるとのこと。ただし聾者の力が必要であり、そのためには手話をもっと根付かせなければいけないとの認識は持っている（TCのことばは聞かれなかった）。今の1年のプロジェクトは15000ドルの事業。サラは英語の勉強をしていて、このプロジェクトに出会ったのだろう（経緯は聞きそびれた）。プロジェクトオフィサーという立場。今は、プロジェクトに関わりつつ、パートタイムで、聾学校で英語を教えている。プレスクールの話は知らなかったようだ。9月からはじめる予定で、今お金の獲得をめざしていることは知らない。キリスト教会の活動とは一線を画しているのか。その他、モンゴルの聾者の情報を得る。聾者と難聴者のためのインターネットカフェがあるそうだ。そこに聴覚障害者が集まるとのこと。副校長もやってきて話をする。聾学校との関係も良好なのだろう。こちらのプロジェクトの話もする。基本的には教室（授業）のフォーカスしたいこと。日本も手話を導入し始めたばかりで、手話の教材なども作っていること、またウズベキスタンでも教材開発を共同研究していることを伝える。共同して取り組めるのではとマルクさんは話す。明日は、ウランバートルの土曜教室に来ている子どもの家庭訪問をするとのこと。日本の手話ができると聞かれ、できるという、明日3時から、聾者に日本の手話を教えてほしいという。了解。結局、金曜日の5時からおしえることに。また土曜教室にも参加予定。10時から6時まで聾学校301室でやるとのこと。

4時、**文部科学省**でミヤグマールさんと会う。40代（あるいは30代？）の落ち着いた感じの女性。肩書きは初等中等教育局のオフィサー、専門官というところだろう。こちらの自己紹介をする。モンゴルの聴覚障害児教育の現状と課題について話をしてもらった。文科省の中で担当は彼女だけ。本当

は幼児教育が専門だが、他にいないので障害児教育までが守備範囲。聴覚障害児教育に関しては、インクルージョンの話がやはり出た。障害の程度が軽い子どもたちが、地域の学校で教育を受けられるよう、学校の先生にも手話の講習を行ったとのこと。現実には、聴覚障害児たちへのサポートは、29 聾学校、ドーナートの通常学校に2クラス（20人ほどの生徒がいる）のみ。残りは学校に行っていないか、通常学級（支援なしで）に在籍している。また知的障害を持つ聴覚障害児も多くいる。先生の養成、研修が大きな課題。また補助金の問題。家族への支援や学校への補助などは十分でない。そのためには制度を改正したり、法律を作ったりする必要がある。その調査のために日本にも行きたいという。日本の特殊教育研究所にもコンタクトをとっているとのこと（彼女自身は日本に行ったことがない）。後は教材作り、保護者や先生への手話の講習、幼稚園など早期教育などなど課題が多い。林健三という方の名刺を出す。インクルージョンに関して活動していたとのこと。国立教育大学の名誉教授となっていた。ただ任期はまだあったが、体調が悪くなり帰国したとのこと。やはりシニアボランティアだったのだろう。モンゴルに745の学校があるが、文部省直轄は5校。そのうちの1つが聾学校。名称が変わったが、文部科学省としても力を入れている。プロジェクトを行ってもらうのはうれしいし、援助もしたいとのこと（リップサービスだろうが好意的なコメント）。ユニセフの援助を得て、2005年に全国の障害児の調査を行った。報告書を1部いただく（モンゴル語）。その後、英語に翻訳されるとのこと。教員研修については、文科省としても十分に専門的な情報を提供できていないとのこと。40代以上はロシアで専門的な教育を受けたが、その後は専門的な教育を受けていない。専門的なコースもない。ロシアで受けた（古い）教育を、そのまま指導を行っている。改善が必要と考えているとのこと。この点で、日本での経験を生かすことができるだろうと話す。1月に専門家会議を開いた。今後この会議で、特別支援教育のカリキュラムを作ったり、子どもを診断する手法、制度や補助金の問題を検討する予定。それ以外には、地方（いなか）も問題。また保護者への支援。障害児を持つ保護者の会があり、自主的な学習を行っている。それを文科省として支援している。全般的に好意的な対話ができた。最後にJICAへもプッシュしてほしいと要望を出す。今回のプロジェクトは2年だが、その後も支援を考えていること。JICAとしても人間の安全保障という考えが提案され、障害者支援など重視されつつあるという情報を提供。過去も1度JICAに提案したがそのときは採択されなかった、文科省としても動くつもりとのこと。

3月7日

聾学校。6年生の手話の授業。先生はオヨンツェツェクさん。年配の聴者。生徒は9人。後からぞろぞろと2人ほどやってきた。机は講義形式。Tがしゃべりながら手話で話している。夏についての歌を指導するとのこと。まず新しいことばを黒板に書く。「花」を書き、手話で示す。手を広げ、中指を鼻の近くに置き、においを嗅ぐしぐさ。もう1つの手は人差し指を手の甲に添える。手話の語源も含め、説明する。生徒は真似をする。次の「果物」。親指を立て、手をコの字のように直角に曲げ、口の方に動かす。親指をきちんと立てるとか、手をこの字にするなど、細かく手の形を説明する。次は「咲く」。片手を平らに置き（これが大地と説明）、もう一方の手を、グーにして他方の手のところから上方に動かしながら、手を広げる。何度も手の動きをしながら、説明していた。それから、歌詞を黒板に書き始める。書き終わると、1文1文手話に変えていく。まず単語を手話で表現して、文につなげる。まさに対応手話。生徒も真似をするが、心なしか元気がなさそう。一通り文を手話にすると、みんな一緒に手話で表現する。先生は歌を歌いながら手話を表現。もう一度一緒に、先生は黒板の文を指す。手話の表現でまずいところを（手がきちんと曲がっていないよとか、ここから手を出すよと

か) 直して、最後に机の横に、円になって一緒に手話で歌う。T は、明日は「女性の日」なので、お母さんに歌ってあげてくださいという。通訳によると、この歌は童謡。過去には学校で教えていたが、最近では教えていないという。どうも T が教えている内容が古いのか(更新していない!)。黒板に書いた文章を生徒がノートに写して終了。先生にインタビュー。いつも歌を教えるのか? とたずねると、いつもではない。ただ歌は感情を表現できるのでいい題材とのこと。歌詞が難しい場合、先生のほうで易しいものに替えて教えるとのこと。もう 6 年生くらいになると、手話が十分できると思うが、それでも教える必要があるのか? とたずねると覚えている単語もあるが、きちんと表現できていないこともある、生徒たちはきちんとした手話を学んでいない、手話のリズムも大切、それらも指導していると言う。カリキュラムについて聞く。テーマごとにやっている。「夏」とか。テーマは同じでも、6 年生は単語を覚えるのが中心、7 年生になると文章をするなど、内容は変えている。授業の終了後、生徒が質問。この手話はこれでいいのかなど。生徒もそれなりに手話歌を楽しんでいるのか? T はこの聾学校で 22 年教えている。専門は物理。大学を卒業し、この学校に来たときは、手話はわからなかった。こどもたちから学んだとのこと。手話の授業は全般的に低迷している印象! 辞書をそのまま教えたり、ASL でお茶を濁したり、歌を歌ったり。マルクたちの NPO の手話研修の経験との交流も必要ではと思った。

3月8日

JICA 事務所へ。所長(守屋氏)と会う。セミナーで使用するために、プロジェクターを借りたいと申し入れると、所長が会いたいとのこと。全般的に好意的。障害者の問題にも関心があるようだ。JICA でも昨年障害者のセミナーを行ったそうだ。日本から肢体不自由の女性と母親を呼び、ウランバートル 24 カ所で講演会を行ったとのこと。こちらの研究の内容(ウズベキスタンの活動も含め)も伝える。また都合がつけば、JICA に来て報告してほしいとのこと。

3月9日

今日は昼まで、部屋で資料の整理。今日のセミナーの資料作りと学校との話し合いの資料作り(プロジェクト案)。1 時に聾学校へ。部屋の準備。3 時には、ぼつぼつと先生方がやってくる。

セミナーでは、日本の聾教育の現状と手話を活用した日本での取り組み(手話ビデオ制作)、それにウズベキスタンでの取り組みを紹介した。

その後、校長室へ。オюнチメグさんも加わり、今回の調査のお礼と今後のプロジェクトを提案(巻末資料)。了承が得られる。校長としては、もっと大々的な教材開発をイメージしていたようだが、規模が小さなプロジェクトなので、パイロット的な研究と理解してもらった。先生 2 人の日本への派遣も OK。こちらの意図していたように、聾の先生(トールさん)と若手の先生(グンジェ)で合意。

5 時過ぎに、301 室に。聾者や聴者に対して、日本の手話を教える。簡単な自己紹介。なかなか盛り上がった。NPO の先生方(表情が硬い! と思った)も今日は柔らかな顔で手話の学習を楽しんでいた。

3月10日

不就学生徒の支援プログラムを見学(聾学校内 301 室で)。今日がプログラムの初日とのこと(1 日 6 時間で 5 回(土曜日)計 30 時間のプログラム)。行ったとき、すでにプログラムは始まっていた。親も合わせると 20 人ぐらいだろうか。子供の年齢は様々。みんな輪になってゲームのようなことを

やっていた（アイスブレイクだろう）。それが終わると、みんな座って（コの字に机が配置）、小さい子どもの横には母親や父親がいる。ただし後で、余りに子どもに手を出すので（あるいは、子どもが先生でなく、隣の親を見るので）、親は背後に座らされた。子どもは指文字表とテキストを見ながら、指文字のAから順番に学んでいく。また親たちにも、指文字のことをTが説明していた。子どもたちは、今の段階では、もちろん手話もモンゴル語もできない。が、とにかく指文字を手で作ること、それを文字と結びつけること、それを課題にしていた。TやサブTが前から、あるいは脇に行って、手をモールドイングしたり、励ましたり。部屋にいっぱいである。子どもたちのリクルートは、まずソーシャルワークで地域に出て行き、それでろう児に出会い、家族にプログラムの紹介をするそうだ。子どもたちは、サラによると、6歳くらいから8歳、9歳くらい。青年もいる。30分ほど見学して、終了した。

資料1：モンゴル・日本・ろう教育共同研究プロジェクト（2007.4－2009.3）

1、研究目標：モンゴルへのろう教育支援を通して、障害児教育分野（聴覚障害児）での国際協力モデルを構築する。

2、関係機関、関係者

- ・モンゴルの聾学校：Gelegjamts,T（校長）；Oyunchimeg（副校長）
- ・その他のコンタクトパーソン：教育省：Myagmar,J.；教育大学：Battsengel,G.；聾者協会：Tsedenbar；Sign and Learn Project；Sarantsetseg,O., Marc Watkins；Education Development for Deaf Children Project: Soyolmar,L

3、プロジェクトの概要

① 材制作プロジェクト

モンゴルの聾学校小学部（概ね1年生から4年生：書きことばの導入期にあたる）の児童を対象とした教材の開発を行う。読み物を主としたもので、新たに作るかあるいは現在あるものを使用。内容をモンゴル手話に翻訳し、ビデオ教材とする。ビデオ制作には聾者の支援を得るものとする。試作したものは聾学校で試用し、評価・改善を行う。

② 絵本プロジェクト

聾学校での低学年の授業や放課後活動のため、手話による絵本を制作する。当面は、日本側が提供した絵本にモンゴル語の対訳をつける。その内容は、手話に翻訳し、ビデオ教材を合わせて制作する。将来的には、モンゴルでその文化にあった内容の絵本の独自制作を試みる。手話表現に関しては聾者の支援を受ける。また絵本を読み聞かせの会なども可能であれば企画・実施する。

③ 協働授業研究プロジェクト

モンゴルの聾学校と日本の聾学校の教師間の交流を行い、相互理解と指導に関する研鑽を深める。具体的には、モンゴルの聾学校の教師が日本の聾学校を視察する。さらに日本の聾学校の教師もモンゴルの聾学校を視察するとともに、相互に研究授業を実施し、意見交換を行う。

④ ビデオ機材等、学習環境の整備

現在、モンゴルの聾学校ではビデオ機材が少なく、必ずしもビデオ教材を活用した授業や学習ができる状況にない。これについては、日本側が別途助成の申請を行うなどして学習環境の整備に努力す

る。

4, 今後の訪問の日程 (予定)

- ①2007年2月-3月: 鳥越がモンゴルを訪問 (2週間)。
- ②2007年6月下旬か7月上旬: モンゴル聾学校教師 (2名) が日本の聾学校を視察 (1週間程度)
- ③2007年秋 鳥越がモンゴルを訪問, ビデオ教材の制作援助, セミナー実施 (2週間程度)
- ④2008年9月ごろ 鳥越がモンゴルを訪問 (2週間程度), 同時期に日本の聾学校教師(2名)がモンゴルの聾学校を視察, 研究授業の実施 (1週間程度)
- ⑤2008年末あるいは2009年初め 国際シンポジウム開催 (日本で)

5, プロジェクトのスケジュール

